

送 辞

— 鳥飼慎一郎先生へ、感謝を込めて —

A Farewell Essay : To Professor Torikai, with Sincere Gratitude

森 聡美

Satomi MORI

異文化コミュニケーション学部が誕生する4年ほど前、私が本学に着任して間もない頃のことである。当時言語科目を担当する教員は各学部に分属という形で所属しており、私は鳥飼先生同様、法学部に配属となった。新任教員歓迎会で、思わず私から先生に声をおかけしたのは、どこかでお会いしたことがあるような気がしたからである。それもそのはず、我が家では教育テレビ (Eテレ) で子ども向けの番組や語学教育の番組をつけることが多かったためか、鳥飼先生の番組 (『NHK 高校講座』) を何度か拝見したこともあり、まるで知り合いのような調子で話しかけてしまったのだ。法学という、当初、私にとっては研究領域としてあまり馴染みがなかった学部で親しみを感じたのは言語担当の先生方であり、なかでも映像で拝見していた鳥飼先生だったのだと思う。

法学部の言語教員としての貢献の模索から、全学の英語教育カリキュラムの幾度かに渡る大規模な改編、そして異文化コミュニケーション学部、研究科の開設から現在に至るまで、いくつもの環境の変化を駆け抜けてきたこれまでの15年間は、鳥飼先生の本学におけるご活躍を後進として追いかけて、影響を受けてきた15年間でもあった。

鳥飼先生の本学への最大の貢献といえは、全学の英語カリキュラムの立ち上げ、そして開発と運営であろう。1996年、新英語カリキュラムの立ち上げメンバーとして全学共通カリキュラム (=全カリ) 発足時に先生は本学に着任された。全カリの英語教育は、当時ほとんどの大学が訳読式の教育を行うなか、異文化理解と発信力の涵養を目標とした内容中心教授法 (Content Based Instruction, CBI) — (学習者の母語を介さず) 学習している言語を使ってコンテンツを学ぶことを通して外国語の能力を高める教授法 — という極めて先進的かつ画期的なカリキュラムだった。

また、統一シラバスや習熟度別クラス編成、そのためのプレイスメントテスト作成と実施、任期付き教員制度など、新しい運営システムを導入することで、新しい教授法を全学規模で実施するという壮大なスケールでの運営を支え、またすべての学生達に対する教育の質を確保すべく力を注がれた。教員も職員もみなエネルギーを振り絞ってカリキュラムの運営に携わってこられ、時代の要請に合わせて、あるいは時代の先取りをするべくさらに改善を重ねる労をいとわない「文化」が作り上げられていく。

鳥飼先生はその活気あるプログラムを運営する中心的なメンバーであり、最新の英語教育学に

関する知見に基づき、カリキュラム開発・運営において中心的な役割を果たすなど、情熱を注がれた。私が着任した2004年度以降も、2006年度、2010年度、2016年度、そして外国語教育研究センター発足のタイミングと共に計画されている2020年度カリキュラム、そして全国的な英語教育の方向転換をリードする2024年度カリキュラムの計画まで、何度も刷新し続けている本学の英語カリキュラムであるが、鳥飼先生はどのカリキュラムにもあらゆる形で関わってこられた。大きな方向転換となった2010年度カリキュラムでは大規模な英語副専攻制度の設計を担当され、一気に案を書き上げられたことは今でも強く印象に残っている。それまでのカリキュラムは1年次に集中的に学ぶことに注力したものだだったが、2010年度からのカリキュラムでは4年間を通して英語学習を継続する環境を整えることに意識が注がれた。2年次以上の英語カリキュラムの設計は、選択科目となることで履修者数が不確定である上に多様なニーズに応える必要があり難しさを伴う。鳥飼先生はそのカリキュラムのプランニングと多岐にわたる科目のシラバス執筆にたずさわり、学生個人の興味関心やニーズ、そして多様なレベルの学生達にきめ細かく対応した多数の授業を考案され、全学の学生達の英語力の伸長に多大なる貢献をされた。日本の中高における英語教育カリキュラムに関する知見や大学生の英語力、将来的な英語のニーズ、英語教育学や言語習得に関する知見等、国内の英語教育事情や学術的知見に加え、強い情熱なしにこのような偉業は成しえないだろう。

先生のエネルギーはこれだけにはとどまらない。英語カリキュラムの運営に情熱を注がれる一方、コーパス言語学のアプローチを用いて司法英語の文法的な特徴をとらえていく研究を地道に重ねてこられた。先生ご自身、大学では法学部で学ばれ、英文で書かれた判例を読む中でその文法や語彙の特徴に強い関心をもたれ、さらに、非英語話者にとってよりわかりやすいようにするためにはどのような工夫が可能か、ということに関心をもっていらしたという。当該テーマでの科研費が合計5件採択されており、20年間にわたり継続的かつ精力的に研究を進めてこられた。具体的には、その研究成果を特定目的の英語 (English for Specific Purposes, ESP) に生かすことを念頭に、語彙や文法上の特徴の研究をされ、得られた知見に基づき英語学習者向けの司法英語の辞書や教材の開発を行ってこられ、ご研究を通して日本におけるESP研究を牽引してこられた。この司法英語の分析は法学部で外書講読の授業を担当されていたころから進めておられた構想でもあり、当時から学生達の学部での学びに寄り添う形での英語教育を編み出してこられた。これは、本学における新しい英語教育の形—内容言語統合型の教育 (CLIL)、英語による専門科目の講義 (EMI) に通じるものでもある。

そして2008年度以降、異文化コミュニケーション学部と研究科においては、英語教育学関連の科目を中心にご担当され、中高の英語教員や教材開発、教育行政に関わる人材の排出に尽力された。学部教育においては、日本における英語教育の位置づけ、役割や各種教授法、さらには諸外国の外国語教育政策やカリキュラム、教材の特徴等に目を向けるよう指導してこられた。研究科ではコーパス言語学を駆使した教材の分析や最新の教授法の研究、ヨーロッパにおける外国語教育の理念と政策等、その守備範囲は極めて広く、多角的な視点から外国語教育に迫り、より視野が広く、異文化理解や異文化コミュニケーション学の知見をもった英語教員を教育の現場に送りだすことに貢献された。

今振り返って思い起こすのは、鳥飼先生の「学生、生徒達の外国語能力の向上に役に立ちたい」という、とてもシンプルで一途な想いと信念徹底のゆるぎない姿勢である。その「能力」とは、文法の理解や文の解釈というメッセージを「受信」する力にとどまらず、実際に存在する「やりとりの相手」とのさまざまなレベルでの相互理解を可能にする「能力」である。そして、より

多様な人々との相互理解を計ることができるようにすること、それが外国語教育の唯一の目的であることを我々に諭していらっしゃるように思う。

最終講義には先生の教え子のみなさんが日本各地から集まって来られた。皆、先生の熱い思いに突き動かされてきたのであろう。先生が長いあいだ日々実践してこられた熱のこもった教育こそが、日本の外国語教育のクオリティを高めていく力となるのだと感じた。これから本学における外国語教育がまたさらなる飛躍を遂げる日を迎える中で、先生に教えていただいた姿勢、価値観、真理を次の世代に伝えていけたらと思う。先生への感謝の念は尽きない。